

「聞いてただろ？」 漫  
画喫茶の壁越しにカン  
トがバレた僕は朝まで  
五回中出しされて位置  
情報を握られた話

股の奥が、疼いた。

パーテーション越しの湿った呼吸音。男の、低く掠れた喘ぎ。深夜一時半の漫画喫茶は不気味なほど静かで、その音だけが鼓膜にじかに触れてくる。

「ふ……っ、ふ……っ……♡」

個室の鍵は閉まっている。蛍光灯を消した室内にモニターの青白い光だけが落ちる。僕は膝を抱えていた。スーツはしわだらけ、ネクタイは首からだらりと垂れ、酒の熱がまだ頬にこもっている。始発まであと四時間。ただ寝るだけのはずだった。

——くちゅ、くちゅ、くちゅ♡

壁の向こうの水音が、否応なく耳に貼りつく。

(聞くな——)

太腿をぎゅっと閉じた。閉じた瞬間、ボクサーブリーフの布地が股間に食い込んで——自分でも驚くくらい、そこが濡れていることに気づいてしまった。

(なんで……っ♡♡)

僕のそこには、男性器がない。代わりにあるのは、二十五年間ずっと見ないふりをしてきた縦の裂け目。カントボーイ。外見は男、骨格も声も男、でも股の間だけが——女だ。

壁の向こうの男の呼吸が荒くなる。しゃくり上げるような、喉の奥を鳴らす喘ぎ。その声を聞いたたびにカントがきゅう♡♡と勝手に締まって、じわ……♡と蜜を滲ませる。

（やめろ、やめろやめろ——僕は、こんなので反応する身体じゃ——）

ぴたり、と音が止んだ。

静寂が個室を満たす。自分の呼吸音だけが聞こえる。心臓が痛いほど跳ねていた。

——コン、コン。

パーテーションが鳴った。

「……聞こえてた？」

低い声。ざらついた、喉に引っかかるような声。

僕は答えなかった。息を殺す。

「聞こえてたな。——息、止めるからバレんだよ」

心臓が喉まで上がってきた。

「っ……」

「見たいなら見せてやるよ。——こっち来い」

パーテーション上部の隙間から、腕が伸びてきた。筋張った前腕、浮いた血管、長い指。モニターの光に照らされたその手が、ゆっくりと指を動かす。おいで、と。

「嫌ならそのまま寝ろ。鍵かかってんだろ。でも——」

声が、わずかに笑みを含んだ。

「お前、もう濡れてんじゃないの♡ 声聞いてただけでパンツ汚すくらい、飢えてんだろ？」

(——っ♡♡)

図星だった。カントがきゅん♡♡と疼いて、また蜜がじわり♡と染み出す。ボクサーブリーフの股布がべったり張りついている。

「10秒待つ。鍵、開けるかどうかはお前が決めろ。お前の意思で堕ちろ。——10」

カウントが始まった。

「9」

(開けるわけない——)

「8」

(知らない男の個室に——)

「7」

カントが、きゅう♡♡と締まった。

「6」

(……っ♡♡ やだ、なんで……下が勝手に……♡♡)

「5」

指が震えている。

「4」

手が——伸びていた。

「3」

(だめ。だめだめだめだめ——)

「2」

鍵のつまみに、指先が触れた。冷たい金属の感触。心臓が壊れそうだった。

——かちり。

ドアが外から引かれる。通路のわずかな光を背に、男が立っていた。背が高い。広い肩幅。三白眼。口元だけが笑っている。

「——自分で開けたな。偉い」

男が個室に滑り込む。背後で鍵を閉める音。振り返ったその目から、さっきまでの気息さが消えていた。

獲物を見つけた目。

「飲み会帰り？ スーツ皺だらけ」

「……っ」

「酔ってるか？」

「……すこ、し……」

「少し、ね。じゃあ鍵を自分で開けた判断は正常だ」

男がフラットシートに膝をつく。狭い個室に男二人。壁際に追い詰められた僕を、モニターの青い光が照らしている。

大きな手が僕の膝に置かれた。指先が太腿の内側をすべり上がる。

「そこは——っ♡♡」

手首を掴んだ。でも力が入らない。酒のせいだ。酒のせいだと思いたい。

「何か隠してんの？」

構わず手が滑った。スラックスの上から股間に到達する——膨らみがない。

指が、止まった。

二秒の沈黙。据わった三白眼の奥で、暗い火がついた。

「カントボーイだ」

歓喜が滲む声だった。

「ちが——」

「嘘つくな。分かる。布越しても分かんだよ、この感触♡♡——ここ、割れ目だろ」

スラックスの上から、カントの輪郭をなぞられた。恥丘の膨らみを親指で押され、裂け目に沿って一本の線を引かれる。ゆっくりと。執拗に。

「んっ……っ♡♡」

「しかも濡れてる。スラックスまで染みてんぞ♡♡ 俺の声聞いてただけでこれかよ」

ベルトに手がかかった。カチャリと金具が外れ、ボタン、ファスナー。手際がよすぎる。スラックスが膝まで引き下ろされ——ボクサーブリーフの前面に広がった濡れ染みが、青白い光にてらてら♡♡光る。

「みっ、見ないで……っ♡♡♡ お願い……っ♡♡」

両手で股間を覆った。その手をまとめて片手で頭上に押さえつけられる。抵抗できない。この男、力が違いすぎる。

「見ないわけないだろ♡♡ ——お前、自分のここ、ちゃんと見たこともないだろ」

下着がずらされた。

二十五年間隠し続けた秘密——僕のカントが、薄暗い漫画喫茶の個室で見知らぬ男に晒される。

「っ……やだ……っ♡♡♡ やだやだやだ……っ♡♡♡」

「きれいだな♡♡ 使った跡がまるでない。処女だろ」

泣きそうな目で見上げた。視界がにじむ。

「俺さ、お前みたいなやつにずっと会いたかったんだよ♡♡  
素人で、処女で、自分の身体すら知らないカントボーイ。  
——今夜、全部壊してやるから」

押し倒された。

フラットシートの上に仰向けにされ、スラックスと下着を完全に剥ぎ取られる。残ったのはしわだらけのワイシャツと緩んだネクタイだけ。ネクタイを掴まれ、ぐいっと引かれた。

「逃げたら首絞まるぞ♡♡」

目だけで笑っている。その笑みが怖い。怖いのに——カントがきゅう♡♡と疼いて蜜を垂らす。

両膝を押し広げられ、M字に開脚させられる。処女のカントは固く閉じているのに、割れ目の合わせ目から透明な蜜がとろり♡♡と糸を引いて垂れていた。

「……っう……っ♡♡ 見な……っ♡♡♡」

「恥丘のそこ、産毛が薄く生えてる。柔っかいな♡♡ ——で、ここ。包皮の中にあるこの小さいの。クリトリス」

（やめて……名前つけないで……♡♡ そこに名前がついたら……っ♡♡♡）

「包皮被ったままカチカチに勃ってんの、二十五年誰にも触られなかった証拠だよ♡♡」

指先で包皮をめくられた。ピンク色の突起が空気に触れた瞬間——

「ひあっ♡♡♡」

腰がびくんっ♡♡と跳ね上がった。触れてすらいない。空気に晒されただけ。二十五年間封じ込めてきた場所が、たったそれだけで悲鳴を上げる。

「触れたことないのにこんだけ勃ってるのは重症だな♡♡ お前の身体、ずっと飢えてたんだよ。お前の頭が許さなかっただけで」

男が顔を近づけた。カントに吐息が吹きかけられる。熱い空気が粘膜に触れて——

「やっ、まっ——っ♡♡♡」



舌先が、クリトリスにちょん♡♡と当たった。

「〜〜〜っ♡♡♡♡」

全身が弓なりに反った。声にならない叫びが喉から漏れる。  
頭蓋の裏側で電撃が弾ける。人生で初めて、クリトリスに他者の舌が触れた衝撃。

（なに——なにこれ——なにこれなにこれ——♡♡♡♡）

「すげえ反応♡♡ 処女の生クリ、舐め心地最高だわ」

舌先が弾いた。包むように舐め上げた。唇で吸い上げ、舌の腹でぐりぐり♡♡♡と捏ねる。

「あっ♡♡ あっ♡♡ あああ……っ♡♡♡ やらっ♡♡ そこ、そこだめ……っ♡♡♡」

（やだ♡♡ おかしくなる♡♡ 頭おかしくなる♡♡♡ 男なのに——男のくせにこんなところで——♡♡♡）

舐めながら片手の指が割れ目の下方に伸びた。入りの肉ヒダをくにくに♡♡と撫で、中から滲む蜜を指先に纏わせる。上と下、同時責め。

「こっちもとろとろ溢れてる♡♡ 触ったことないのにこの量かよ。身体は正直だな——頭は嫌がってるのに、まんこはもっとくれて言ってる♡♡」

「まっ……そんな呼び方しない……で……っ♡♡♡」

「じゃあ何て呼ぶんだよ♡♡ お前のここは何だ？」

「……っ♡♡♡」

「言えないだろ。言えないくせに、こんなにとろとろ蜜垂らしてんじゃん♡♡」

舌使いが激しくなった。弾くだけでなく唇全体で包んでじゅるるっ♡♡♡と吸い上げ、舌を振動させるように震わせる。同時に入り口の肉ヒダを指でくにくに♡♡捏ね、中の蜜をくちゅくちゅ♡♡♡と音を立てて掻き出す。

「ひっ♡ ひっ♡ ひう……っ♡♡ あ、あっ♡♡ むり……っむりむり……っ♡♡♡♡」

(だめ……っ♡♡ 何か来る♡♡ お腹の奥から何か——来る——♡♡♡♡)

腰がガクガク震え、両手がシーツを握りしめ、目の焦点が合わなくなる。男は止まらない。クリトリスを一際強く、じゅう♡♡♡と吸い上げた——

「ひおおおおッ♡♡♡♡」

全身がびくんっ♡♡♡と跳ねた。太腿が男の頭を挟み込み、カントからじゅわぁ♡♡♡と愛液が溢れ出す。涙が頬を伝い、つま先が丸まり、背骨が反り返る。

人生初のアクメ。

ぴくっ♡ ぴくっ♡ ぴくっ♡……痙攣が収まらない。視界が白く滲んだまま、呼吸が追いつかない。

「初イキ、いただき♡♡」